

## 農林水産大臣賞

### 石畳を思う会 石畳自治会（愛媛県内子町）

#### 「豊かな暮らしを未来に ～村並み保存で地域を創ろう～」

内子町石畳地区は、町の中心部から約 12km、一級河川「小田川」の支流「麓川」の源流域に位置する、農林業を主体とした人口約 380 人の小さな地区です。ご多分にもれず過疎化・高齢化が進む中で、「このま

までは集落が消えてしまう」「石畳を誇りに思える地域にしたい」と昭和 62 年、農家の若者や町職員の有志 12 名（現在は 25 名の会員）がゲリラ的に「石畳を思う会」を結成、石畳の地域づくりをスタートさせました。



同会では、①会則を持たない。②補助に頼らず自立する。③多数決制をとらず、提案者がリーダーとなって活動をする、この3点を基本理念とし、石畳自治会をリードする形で活動を展開しています。

### ○農村文化の継承と景観保存

石畳地区の「村並み保存運動」の最初の取組みは、水車小屋の復元です。平成2年に「石畳を思う会」が、地域の生活文化を継承し活性化をめざしたいと、自らの山林から間伐材を搬出、費用も会員が出し合って石畳の農村風景のシンボルである水車小屋を復元完成させました。農繁期の中での建築作業ではありませんでしたが、会員同士が思いを共有し、汗を流して作った水車小屋は、地域外からも高く評価され、会員に大きな満足感と自信をもたらすとともに、地域住民の価値観の転換に大きな影響を与えました。

石畳自治会では、「地域づくり計画」の一環として平成 15 年から「古木の里づくり運動」と題してシダレ桜の植栽をしています。これは地域にある樹齢 350 年といわれるシダレ桜の穂木をとり、接木してその子孫を残そうというものです。そのほか、毎年4月に本地区の玄関口となる、県道沿い約1kmに、老人会が花いっぱい運動を展開しているほか、小集落単位でも屋根付橋の保存活動や湧水地の整備なども行わ



れています。

### ○ホタル保護から地域の環境保全運動へ

石畳地区にはホタルが数多く生息することから、「ホタルの棲める川を保全しよう」と、平成8年から毎年5月下旬～8月上旬にかけて、ホタル観察活動を「石畳を思う会」で行っています。さらに同じ時期に自治会と共催でホタル学習会を開催。行政機関にも参加を促し、地域内においてやむなく河川工事が必要な所には近自然工法の導入を行政に訴えるとともに、自らも近自然工法の先進地・スイスへ研修に行き、水路や堰工事の際の導入に結びつけました。現在は、川だけでなく、田畑や山の自然にも目を向けようと「自然観察会」を毎年行っているほか、ゴミの回収や不法投棄の防止運動も行っています。

### ○地域資源を活かした交流活動

水車小屋整備を機に平成4年から毎年11月3日に「水車まつり」を開催しています。地域の食材を使った料理、自然を活かした子供たちの遊びや、地元農産物の販売など、住民手作りイベントが好評で毎年町内外から約 1500 人の来場者で賑わっています。また、最近では、「地元学」と称し、「あるもの探し」などのフィールドワークによって、地域の暮らしの豊かさ



を再評価。その成果として、平成16年に石畳自治会で『石畳むら並み博物館』構想をたて、街の人たちとの交流事業を展開しています。その取組みの一つ「石畳発—生活文化の旅」では、集落をまるごと博物館とみたて、農家の庭先での郷土料理を食べ歩き、竹・わら・かざら細工の体験を行いました。これまでに平成16年の春編、秋編、平成17年の秋編と3回開催、毎回会場(集落)を変え、集落ごとの暮らしや景観の魅力を最大限活かしたおもてなしイベントとして定着しつつあります。

また、平成6年には地域住民が運営する農村体験宿泊施設「石畳の宿」がオープンしており、地元産の材料にこだわった料理のもてなしが大好評で、毎年2000人を超える利用者がいます。

#### ■講評

山間部という生活条件の厳しい地域で、住民自らによる地域づくりを通じて、美しい景観の保全を行っています。会では、会則を持たない、補助に頼らず自立する、多数決制をとらず提案者がリーダーとなって活動をする、などユニークで自主的な活動が特徴です。また、集落をまるごと博物館とみたて、郷土料理の食べ歩き、竹・わら・かざら細工の体験などによる都市住民との交流も盛んです。このように、住民自らによる活動で形成された景観を活かして交流活動を行うなど、景観づくりが地域の活性化に大きく寄与していることが高く評価されました。

